九州の平安陶磁

亀井明徳

平安時代における九州の陶磁器は在地土器の中に占める輸入陶磁器の割合が非常に高い点に最大の特徴が指摘できよう。

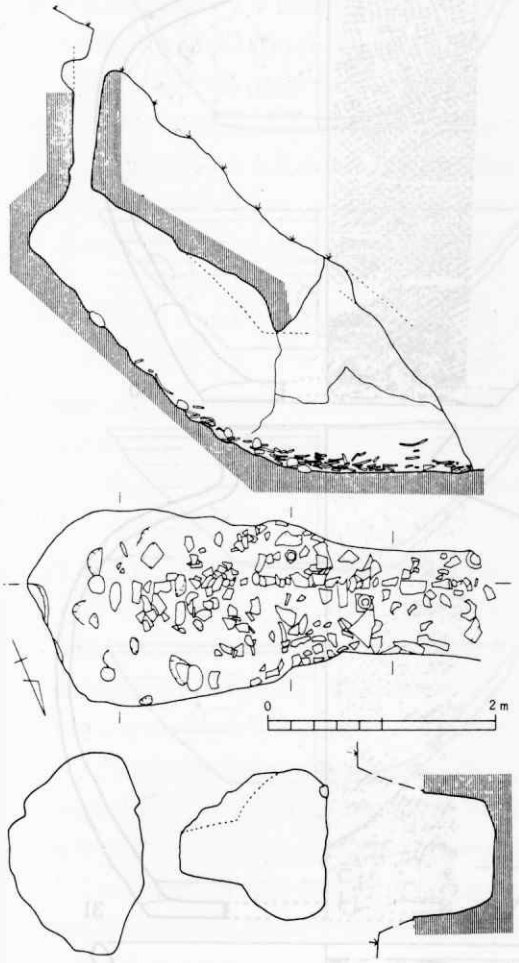
しかし、これら輸入陶磁器の占める割合や在地土器への影響についてもう一歩進んだ具体的な研究になると残念ながら十分と言えない。後者の課題に関して結論としては輸入陶磁器を模倣したりあるいは強く影響を受けたと思われる在地土器は非常に少ない。その少数例として北宋後半期の白磁碗の器形を意識的に模倣したことが認められる窯跡出土の須恵器系土器を紹介したい。この窯跡は熊本県球磨郡錦町一武字下り山にある下り山1号窯である。昭和41年8月に球磨工業高校の渋谷敦教諭らによって発掘調査が行われ、この概要も公刊された。昭和54年度に熊本県教委の松本健郎氏らにより「生産遺跡基本調査」の一環として改めて遺物の整理が行われ、そのの概要が明らかになってきた。以下この報告(『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』熊本県報告第48集 1980)に基づいて記す。

第1図 人吉盆地の窯跡

下り山窯跡は人吉盆地の南縁部の大平山(標高1,002m)の北側山麓の標高204～220m前後の斜面に立地する。昭和41年の調査で確認された窯跡は9基であり西区(1～3号窯)中央区(7、8号窯)、中北区(4～6、9号窯)の3区に分けられる。西区は3基が2m間隔で並列するが、この中で注目するのは西区の1号窯跡である。窯体の全長は約4mの小型で、地山の粘土を刳抜いて構築された窖窯である。主軸方位はN－67°－Wを指し、北西に開口し燃焼部の天井が一部崩壊している他は良く遺存していた。燃焼部は幅0.9～1mを測り床面はほぼ水平であり焼成部との境は約1.4m奥にある。焼成部は入口から奥へ約3.2mの付近で最大幅1.7mを測る。天井部は一部剝落しているものの全体的に良く残っており、最も高い所で1.04mを測る。焼成部床面には小さな窪みや石、粘土を利用した焼成壇状のものがみられるが全体に設けられた階段状施設はない。床面傾斜は42°と急傾斜である。煙道は奥壁より手前に穿たれ径18～22cmである。

この窯跡の出土品は瓶、壺、鉢の比較的大型品が多く、小型品ではわずかに碗がみられる。胎土はきわめて緻密であるが、いずれも白灰色を呈し軟質のものが多い。

瓶には細頸のものの口縁部片が少数と、水注が1点あり、その他は盤口瓶である。盤口形(20、21、24)は口径18cm、胴部最大径20.5cm、底径14cm、器高28cm前後である。盤口形は稜をすでに失い曲線となり肩部に最大径があり平底にしている。外面には格子叩きが施され肩部付近あるいは胴部下半まで叩きの上にカキ目がみられ胴部下端は篦削りされている。底部はナデ調整されているものと平行条線叩きを施したものがある。



第２図　下り山１号窯跡(下り山窯跡調査団原図)

壺（30）は器高が低く底径の大きいタイプで頸部から胴部下半まで格子叩きとカキ目が施され、下端部は篦削りされている。内部はナデによるものと平行条線叩きの調整がみられる。

鉢は平底のもの（41）と高台付のもの（45）がある。平底鉢は体部外面に格子叩きが残され、内面は櫛目の上をナデて調整し、外底部には平行条線叩きが施され、その上から篦削りやナデ調整している。これに対して高台付鉢は内外面とも丁寧にヨコナデし、叩き目や櫛目は観察できない。（45）は口径27.6cm、底径12.6cm、器高11cm前後を測る。

さて少数ではあるが、碗について述べよう。破片を含めても15個体分に満たない。口径は最小で15.4cm、最大18.8cmであるが多くは16cm前後の数値である。器高は最大6.3cm、最小5.1cmであり５cm台が多い。平底の径は最小6.6cm、最大9.0cmであり7.2cmのものが多い。体部内面は全体を丁寧に磨くようにして器表はきわめて緻密であり、外面には指圧痕が多く付着している。体部の内弯はあまり大きくなく、直線に近く延ばすもの（２、３）とかるく内弯するタイプ（５～９）がある。底部はすべて平底で篦切りのあとナデて仕上げている。注意されるのは口縁形態に２種類があることで、端部をわずかに外反するもの（１～４）と玉縁状につくるもの（５～９）がある。この玉縁は折り返しではなく粘土紐を貼付している。この形態の碗は報告書がすでに指摘しているように中国製白磁碗の模倣である。

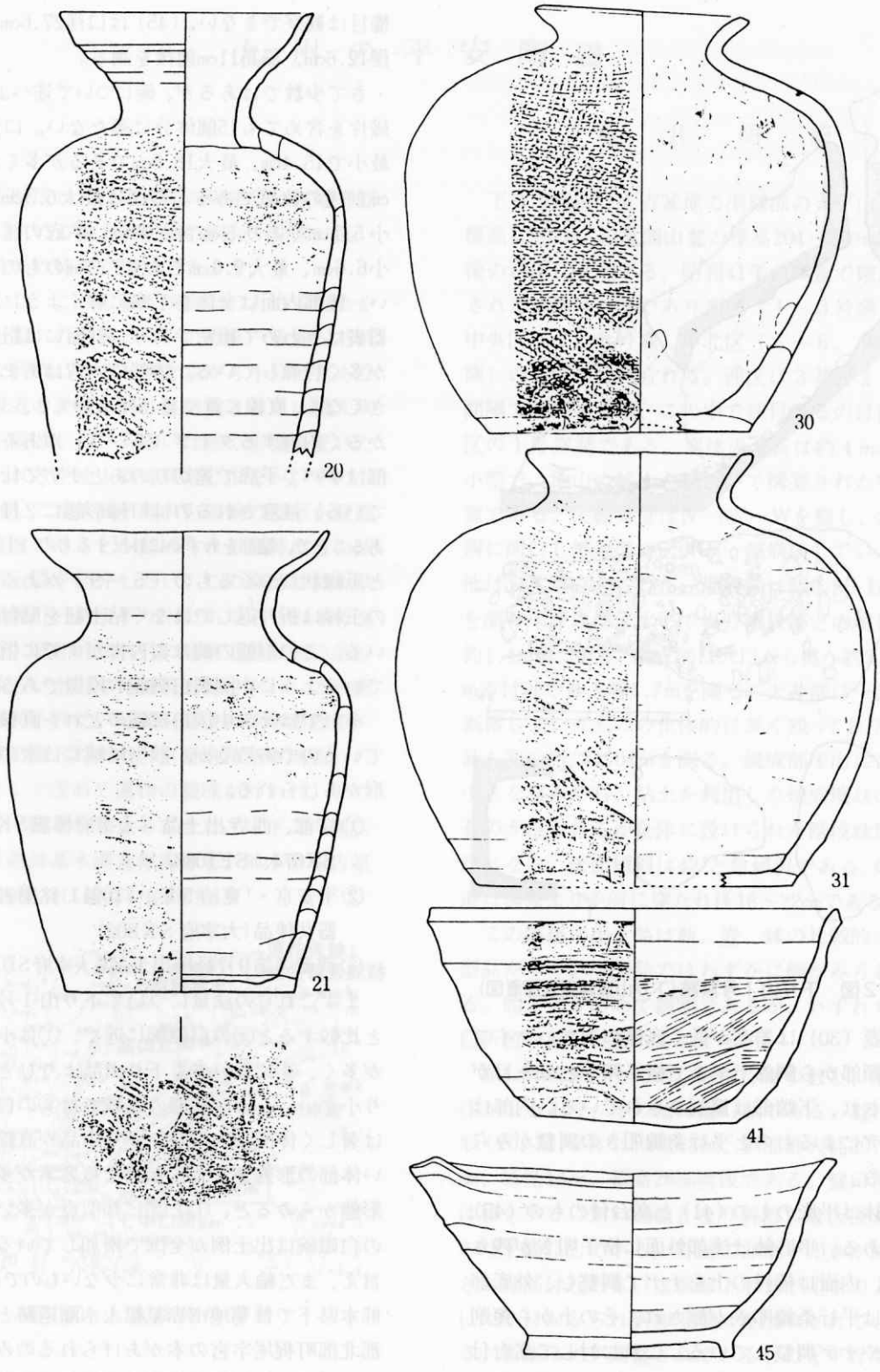
それではその中国白磁碗のどれを直接まねているのであろうか。該当候補には次の３器形があげられる。

①京都、西寺出土品（大宰府標識SK678 SK674、SE1083）

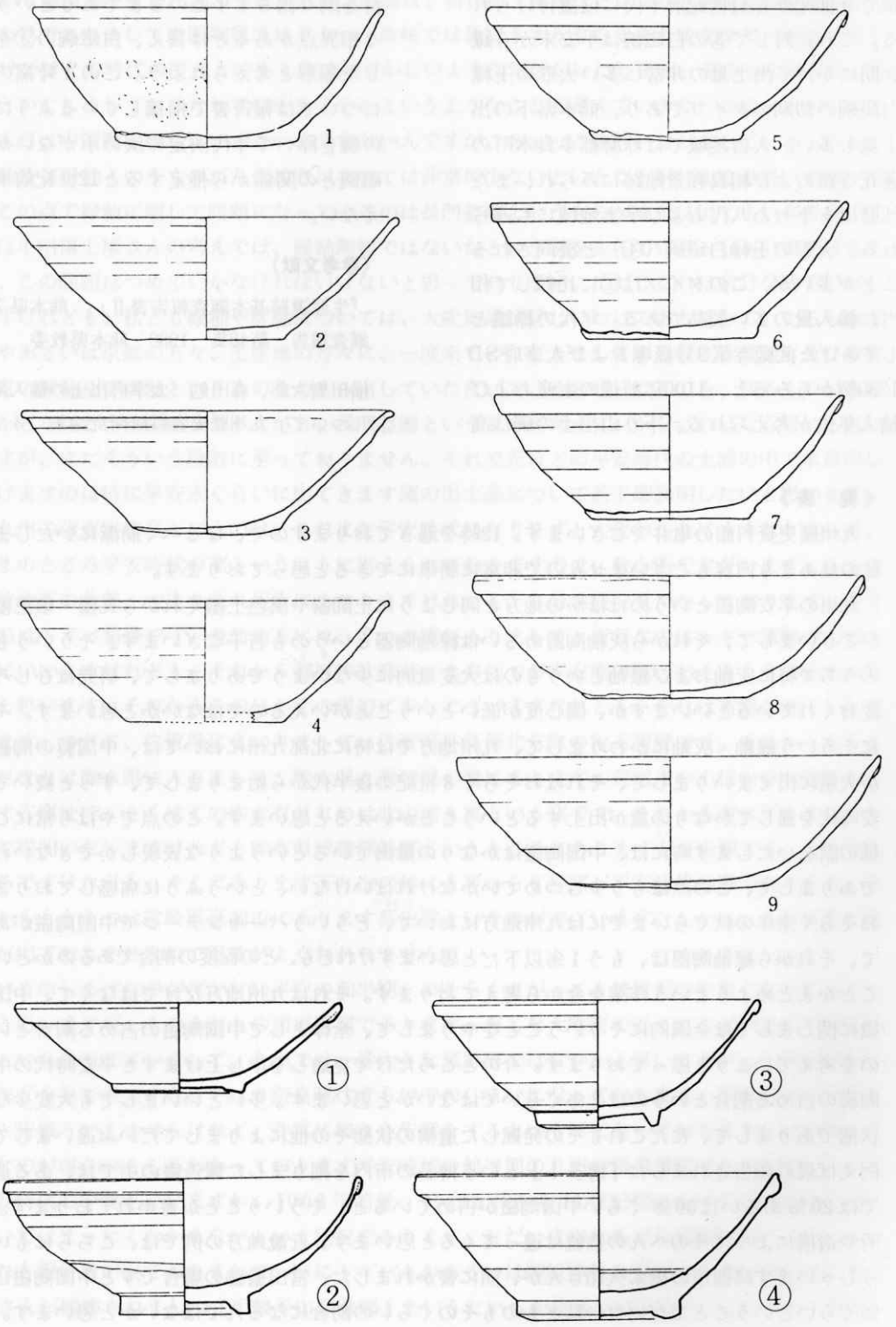
②平安京・「寛治５年」（1091）銘墨書須恵器共伴品(大宰府ＳＫ802)

③武蔵寺第9号経塚出土品（大宰府SD1330）

まずこれらの法量について下り山１号の碗と比較すると②の白磁碗に近く、①は小形品が多く、③においても下り山品よりひとまわり小さい。しかし形態の比較では②の白磁碗は著しく体部が内弯し、下り山品が直線に近い体部の形態を考えると異なる要素が多い。形態からみると、①と③に類似点が多い。①の白磁碗は出土例が全国で増加しているとは言え、まだ輸入量は非常に少ないものであり、熊本県下では菊地市赤星福土水溜遺跡と飽託郡北部町梶尾字宮の本があげられるのみである。いずれも越州窯青磁と共伴する時期の白



第３図　下り山１号窯跡出土遺物　（縮尺１：４）



第4図　1～9　下り山1号窯跡出土遺物（1：3）
①～④　中国白磁碗（1：3）

磁で9世紀から11世紀前半代に位置付けられる。これに対して③の白磁碗は平安末から鎌倉期にかけて出土量の非常に多い大形の玉縁白磁碗の初期のタイプであり、熊本県下の出土量も多い。人吉地域では球磨郡多良木町の蓮花寺跡および相良頼景館跡にみられ、また球磨川を下った八代および宇土地域にもみられる。大形の玉縁白磁碗（④）と混同されることが多いが、このタイプは①に比較して相当に輸入量の多い製品である。年代の標識としてあげた武蔵寺第9号経塚および太宰府SD1330例からみると、1100年前後の生産および輸入年代が考えられる。下り山出土の碗は高台を削り出さず平底のままであるという大きな相異点があるとは言え、白磁碗の③を模倣した器形と考えられよう。この1号窯の年代については報告書で指摘しているように、この碗を除いて年代決定の決め手がないが、白磁碗との関係から推定すると12世紀前半と考えたい。

《参考文献》

『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』　熊本県文化財調査報告　第48集　1980　熊本県教委

横田賢次郎、森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について」九州歴史資料館研究論集　4　1978

《発　表》

九州歴史資料館の亀井でございます。12時を過ぎておりますので、なるべく簡潔にいたします。私のはあまり内容もございませんので非常に簡単にできると思っております。

九州の平安陶磁というのはほかの地方と同じように土師器や黒色土器それから瓦器・須恵器等がございまして、それから灰釉陶器あるいは緑釉陶器というのも若干ございます。そういうもののうちで特に灰釉および緑釉というものは大変量的に少ないようでありまして、研究はむしろ大変おくれているといいますか、関心度が低いということがいえるのではないかと思います。それにそういう緑釉・灰釉にかわりまして、九州地方では特に北部九州においては、中国製の陶磁器が大量に出てまいりまして、それはおそらく8世紀の後半代から始まりまして、ずっと続いて平安時代を通じてかなりの量が出土するということがいえると思います。この点でやはり常にこの種の話をいたします時には、中国陶磁はかなりの量出ているというような表現しかできないわけでありまして、この点はもう少しつめていかなければいけない、というふうに痛感しております。おそらく来年の秋ぐらいまでには九州地方において、どういうパーセンテージで中国陶磁があって、それから緑釉陶器は、もう1％以下だと思いますけれども、どの程度の割合であるのかということをまとめようという作業を今から考えております。それは九州地方だけではなくて、中国陶磁に関しましては全国的にそういうことをやりまして、全体として中国陶磁の占める割合というのを考えていこうと思っております。今のところだけで見通しを申し上げますと平安時代の中国陶磁の占める割合というのは2％ぐらいではないかと思います。多いといいましても大変少ない状態でありまして、ただこれもその発掘した遺構の状態その他によりましてだいぶ違いまして、例えば最近報告されました『博多Ⅰ』という博多の市内を掘りました報告書の中では、ある遺構では20％あるいは30％ぐらい中国陶磁が占めていると、そういうことが書かれております。場所や遺構によってそのへんの数値は違ってくると思います。近畿地方の例では、こちらにもいらっしゃいます高槻市の橋本久和さんが、前に書かれました、宮田遺跡の場合ですと中国陶磁は1.5％ぐらいということでだいたい私どものもそのぐらいの割合になるんではないかと思います。ただこの種の数字はいろいろ数字だけでは考えられないところがありまして、昨日も、三上次男先

生から御指摘を受けたんですけれども土師器は、特に皿・椀類などはかなり消耗品的に使っていくわけでありまして中国陶磁等はそういう意味では長続きするものでありますので、単純に数字だけではその時代の復元というものはむずかしいような気分がいたします。そのへんは解釈の問題といたしまして、はたして何%あるのかというようなことも考えていきたいと思っております。

本日は中国陶磁の話はいっさい、でもないんですが、ちょっと除外いたしまして、ようするに灰釉及び緑釉というものが九州地方においては非常に少ないということがいえると思います。ただこの点で緑釉に関して問題になってくるのは長門瓷器というものが文献に出てまいります。これは小田富士雄さんの考えでは、緑釉陶器ではないかという説をもっていらっしゃいますけれども、この問題はつめていかなければいけないと思っております。ただしこれは余計な話でございますけれども、私ども緑釉や灰釉については、大変知識が乏しいわけでありまして、こちらの方々やあるいは京都の方々、生産地の方々に、一度来ていただきましてある程度近畿地方及び東海地方の緑釉及び灰釉というものをつまみ出していただいて、その残ったものを、残るものがあるのかどうかという問題をやりながら、長門瓷器というものを考えていかなければならないと思いますが、まだそういう段階に至っておりません。それで先ほどの平安時代の土器の中で本日申し上げますのは特に平安末ぐらいに出てきます窯の出土品について若干御説明したいと思います。

九州の須恵器生産というのは、これまた平安時代になりますと大変わかりにくくなりまして、いまのところ平安時代の窯というふうに考えられておりますのは、数か所でございます。1つは豊前地方の北部、つまり北九州市にあたりますけれども、この地域で見つかっております。有名なのはトギバ窯跡です。豊前地方には、2つの窯がありまして、有名なのはトギバ窯跡の上層を特にいいますけれども、それから御祖(ごそ)神社窯跡、この2つが平安期の窯、おそらく9世紀代の窯だと思います。それからそのほかその周辺に少しございますけれども、それは省略させていただきます。つぎに、佐賀県にまいりまして、佐賀県杵島郡北方町の牧古窯跡です。それからもう1かたまりは熊本県に入りまして、熊本県と福岡県の境にあります。荒尾市の小岱山の山麓にあります古窯址で、とくにこの中で有名なのは北山浦A窯という窯です。それから南に下りまして今日ご説明いたしますけれども熊本県球磨郡錦町というところにあります下(ヤガ)り山窯です。人吉のところですけれども、そこにあります下り山の特に5号から8号窯が平安時代の窯であります。それからもう1つは宮崎県延岡市にあります苺田(いちごだ)窯というのがございます。しかし、これはまだ報告が出ておりませんので実体がよくわかりません。

いま申しあげたのがだいたい平安の前半期、おそらくさがっても10世紀の中葉ぐらいではないかと思いますが、そのあたりの須恵器窯であります。有名な大宰府の近くにございます牛頸窯跡群というのがございまして、九州では一番大きな窯跡群ではないかと思いますが、その牛頸窯跡群などを見てみますと、やはり奈良時代ぐらいでおしまいになっております。平安時代に入りますと皆無といえませんけれど、非常に細々と生産をするという形になっております。いま申し上げたのが現在のところわかっております平安時代の前半期の九州の須恵器窯であります。そして平安時代の中葉といいますか、1000年前後、10世紀代から11世紀代にかけての須恵器の窯についてはまったくわからないという状況であります。ただいま申しあげた須恵器窯についてはいずれも報告書が出ておりまして、特にトギバとかあるいは御祖神社の窯につきましては小田富士雄さんが編集されました『天観寺山窯跡群』というたいへん部厚い報告書がございます。それから北方町の牧窯跡についても簡単な報告書がでております。それから今日も触れますが、北山浦

A窯というこれまた古い発掘なんですけれどもこれについては大変いいまとめが出ておりまして、昨年だと思いますが熊本県教育委員会が発行いたしました『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』というのが出ておりますのでそれを参照していただきたいと思います。

平安時代にはいりましてこの種の窯で特に出てくる器形といたしましては瓶でありますけれども、その瓶のうちでいわゆる盤口瓶といいますか、盤形の口縁をいたしました瓶がかなり出てまいります。それからもう1つは双耳瓶、この2つが非常に平安時代になって目立ってくる器形ではないかと思います。おそらくこの種の器形というのは平安時代の前半期で終るんだと思いますが、その辺はまだつめている状態でありませんで、いま申しあげたぐらいがだいたいの現在の私どもの持っている知識でございます。

さて、今日申し上げるのは平安中期を除き――ちょっとわからないので止めまして――平安後半期に入りまして1つ窯を見つけております。それがレジュメにもございます窯でありまして、下り山1号窯です。この窯は昭和41年に地元の先生が発掘調査をされまして、その後遺物が地元においてあったわけです。それをみると非常にかわった器形が多いものですから、これを熊本県が再調査といいますか、遺物の調査をいたしまして報告をまとめられたものです。ですから遺構その他について全く当時の図面によるしかないわけでありまして、31ページ（本書P129）に載せましたのも当時、41年段階でやったものでありまして、あまり詳しいことはわからないのです。しかし全体の窯の構造としましてだいたい特徴的なのは非常に短かい窯であって急傾斜であることです。全長でおそらく4*m*ぐらいのものだと思いますが、焼成部の角度がたいへんきつい角度でありまして、床面42度という急傾斜で短かいという窯であります。そして焼いている物は限られておりまして、器形は椀類と瓶、水注だけであります。そして椀類は今日申し上げますけれども、この窯の中では少数の割合のようでありまして、瓶および壷の類の方が多いようであります。それで全体を通じてこの窯で焼かれた製品というのは焼成が不十分で、色としまして白っぽい灰色をしているという、そして軟質手のものであります。しかし胎土はわりと緻密な素地をもっております。こういう土器をなんという名前でよんでよいのか私にはよくわかりません。昨日のお話で須恵器系という言葉が出てまいりました時に、昨日の概念では須恵器系では器面調整はしないということを発表されたようでありますけれども、ここの鉢類などでは内面を磨いておりますので、そういう点からいうと少し昨日の概念とははずれるというところがあります。しかし須恵器の系統を踏んでいるんだと思いますし、それから酸化焰焼成であると思います。それでは早速スライドでみていただきたいと思います。

（スライド説明）

(1)•これが数少ないうちの15個体ぐらいあるというのですが、椀であります。口径が15*cm*ぐらいのものであります。これに2種類ありまして、ここにでてきたのは口縁が単純な形態でありまして、わずかに外反しているタイプです。

(2)•その裏でありますがここで見ていただきたいのは高台がベタ底の高台でありますけれども、高台をなにか作り出そうとするそういうところがあります。それからこの椀にかぎらず九州地方においてはずっとヘラ切りをつづけておりまして、これを結論から言いますと、おそらく11世紀後半から12世紀にかけてのものだと思いますが、あい変らずヘラ切りでありまして、そのあとをナデているという調整のしかたであります。

(3)•いま申しあげたこの種類、前の椀類と大きさにおいて変らないものでありますけれども、昨日

出てまいりました玉縁に作っているという椀であります。この玉縁の作り方はこの幅の粘土紐を貼り付けるというやりかたであります。

(4)・これがその部分でありまして、細い粘土紐を貼り付けていくという作りかたであります。

(5)・先ほどのものと同じように頸部の作りは同じであります。内面は磨いております。ヘラ磨きほどの細い線ではないんですけれども、磨いている状態であります。

(6)・器種の中でいま申しあげたものと、揑鉢といいますか鉢があります。これに2種類ありまして、高台のあるものと、ないものというこの2種類があります。もちろん内側には筋目は入っておりません。

(7)・これは高台がないものでしょうか。

(8)・前のは外面の叩きがほとんど消えているわけですけれども、こちらのほうでは、外面にこの種の格子状の叩きをいたしまして、このあたりは削るという。これは壷の類にも共通してみられる手法であります。

(9)・それからもう1つは底部に条痕の叩きをもっているといは壷にもこういう手法がみられます。

(10)・これが共伴する壷でありますけれども、やはり格子目の叩きで、内面はなにか石状のもので受けているということでありまして、青海波はございません。

(11)・これが瓶の類だと思います。おそらくさきほど申しあげました9世紀前半代ぐらいにでてきます盤口瓶というものがくずれてきまして、肩の部分がもう大変丸味を帯びてしまっているというふうにくずれてきているんではないかと思います。いずれにしてもこの種の器形が11世紀の終り後半代ぐらいまでまだ続けて作られているというところがあるかと思います。

(12)・いまの底部であります。やはりこの種の叩きをしておりまして、このへんは削っていって胴の半ばぐらいはすべて格子目の叩きでいくという手法であります。

(13)・やはりここから出てきました瓶であります。これは比較的よく焼けてるといいますか、焼きのよい堅いものであります。

(14)・これはここの出土品ではございませんで、この種の盤口瓶が、蔵骨器として使われて、佐賀県下から出てきたものであります。これはやはり少し時代が平安前半ぐらいに考えたらいいのではないかという器形であります。

(15)・それでいま申しあげたのがいずれも下り山1号窯から出てきたものであります。これから4～5枚のスライドは下り山窯群出土品であるということは確かなんですけれども、1号窯のごく周辺だというふうに考えているものでありまして少し違ったものが出てまいります。

(16)・これはやはり椀であります。なにぶん古い発掘調査ですからどこの窯から出たものかは正確にわからないという意味なんです。これは先ほどのこの種の椀では高台がまったくなく、平底高台だったのですけれども、これは貼り付けの高台に作って、しかもこの部分（口縁部）をやはり肥厚させているという形態であります。

(17)・やはり、きちんと高台は作りまして、そしてこのところ（口縁部）にこれは少し削ったようにして肥厚させているものです。

(18)・これは非常に顕著に粘土紐を貼り付けたことが明らかで、しかも高台は貼り付け高台でいわゆる輪高台にしているものであります。これが1号窯かどうかよくわからないですが、まあ違うと思いますが、ごく周辺で焼かれたものであります。

(19)•いまの椀の底部でありまして、だいたいにおいてこの種の焼成具合であります。非常に軟質でこういう類のものを焼いております。

(20)•それで、1回もどりまして、はたして今の輪高台のものを含めましてこれがいつ頃の時期かということを先ほど結論だけ申し上げましたけれども、まずあまりその拠るべき根拠というものがありませんので。一見したところこれは中国陶磁の写しではないだろうかと。たいへん大雑把でございますけれども中国陶磁の写しと私は判断しまして、いわゆる玉縁口縁のものであろうということを考えました。そしてそれの形態を考えてみますと、

(21)•中国製白磁の玉縁口縁碗というものの種類といいますか、ごくおおざっぱに申しあげます。この白磁はちょうど真ん中で半分に割れて埋まっていたものなんですけれども、いわゆる晩唐から出てくるタイプの白磁碗でありまして、最近の中国の見解では河北省の邢州窯の窯であるということをいっております。私は以前に邢州窯ではないというふうに書いたものですからまだその説には従っておりませんが、中国の学者は全てこの種のものは河北省邢州窯の白磁であるということをいっております。こういう白磁がまず最初にだいたい9世紀代からおそらく11世紀前半ぐらいまでは生き残ってきて、非常に長く、しかもこれは日本全国から出土しますし、日本以外のところからも出土する白磁碗であります。この特徴は非常に小さいものが多いといいますが、器高の低いものが多いようで、いわゆる平茶碗のような形をとるものが多いようであります。

(22)•今のの裏面で、この裏にもいろいろありますが、いわゆる幅広の玉磨高台を作っていくというタイプであります。

(23)•それから次に出てくるのがレジュメでは33ページ（本書P 131）の③番と書いたものであります。この品物は福岡県武蔵寺経塚というところで12世紀前半代のものという経塚であります。しかしこの種のものはどうやら11世紀の後半ぐらい、中葉ぐらいからわが国で出てくるようであります。それはさきほど来の、京都の報告などでかなりこれに類するものが11世紀の中葉、11世紀の後半というところで考えられておりますので、だいたいそのへんをふんでおきまして、11世紀後半から12世紀前半代の早い時期まで、この種のものが入ってきてるだろうと思います。

(24)•それからこれも白磁碗です。寛治5年の出土品のいいスライドがないんですけど、いわゆるいま申しあげた武蔵寺タイプの白磁碗と寛治5年の白磁碗というものは、私はおそらく前後した関係で出てくるんじゃないかと思うんです。つまり11世紀前半ぐらいから出てくると判断しています（スライド終り）。

それからもう1つは33ページ（本書P 131）の下の図・中国陶磁の図面で④番としたものであります。これは③番とよく似ているんですけれども、③番の方が全体として小ぶりであるというようなことや、玉縁の形があまり肥厚していないというようなところが特徴であります。③番と④番というのはよく間違えていくわけですけれども、やはりこれは区別して、おそらくこの図面でいきますと②番といういわゆる寛治5年タイプのものと③番というものが私は前後関係で出てくるんじゃないかと思っております。それから④番というのはやはりもう少し後で、これは12世紀に、11世紀は無理だと思いまして、12世紀に入りまして前半代から出てくるんじゃないかと思います。この④番という形のものはずっと続いておりまして、13世紀代でも非常におおく各地で出てくるというタイプであります。それでいま、下り山1号窯の年代決定でほかに何も基準がございませんので、これとうまくこじつけようということを考えました。おそらくこの②番③番のうちのどちらかではないだろうかと私は考えております。②番の方がやや内弯度が強いのが多いようであ

りますので、むしろ③番という形のものに近いんではないかと私は考えております。そしてその年代からおしまして下り山1号窯というのを11世紀後半から12世紀前半代ぐらいに考えております。それからそれ以外のことを考えますと鉢という捏鉢の類というものが九州で初現するのはおそらく12世紀の前半代ぐらいです。これは大宰府の発掘例からいきまして12世紀前半代ぐらいではないだろうかという見解をもっております。それから先ほど少しいいましたけれども、ヘラ切りと糸切りというものの転換というのが12世紀前半ということを考えますと、これらの下り山のものがヘラ切りで終始しておりますので、糸切り以前のものというふうに考えまして、いま申しあげましたような年代を設定していきたいと思っております。

しかし、これがどういうふうに供給されたかという、あるいはその消費地からの出土品というのはございません。それからこのあたり12世紀からその後ずっと続けて須恵器窯があったのか、須恵器系の窯があったかというと大変むずかしいところであります。私、前に書いたことがございますが、やはり熊本県の荒尾の近くにあります樺万丈(かばのばんじょう)窯というのがありまして、擂鉢および壷・甕などを作っている窯でありますけれども、これはもう少し下げまして13世紀代というふうに考えております。九州において平安末の窯というのはまだこれ1例でありまして、たいへん研究が遅れております。私の報告は以上でございます。

(発表以上)

── 質疑なし ──